

出撃命令を待つ^{しゅつげき}

飛行訓練の目的

わたしの任務^{にんむ}は、海軍の「特別攻撃隊^{こうげきたい}」として、「飛行機で、敵の軍艦^{ぐんかん}や飛行機に体あたりをすること」でした。

どうしたら正確^{せいかく}に敵^{てき}に体あたりができるか——これがわたしたちの飛行訓練の目的です。

わたしは、茨城^{いばらき}県の「筑波航空隊^{つくばこうくうたい}」で、いろいろな飛び方の訓練をしていました。

なかでも大切なのは、編隊飛行へんたいといって、列をつくって飛ぶこと。

先頭のわたしが目標を決め、向きを変えて下に向かうと、後ろに続く者は同じ位置から同じように下へ。全部の動きを、わたしの機と同じようにしなければなりません。

最初は、みな精せいいっぱい、スピードや飛行角度のメーターを見る余裕よゆうもありませんが、一番機の行動を見のがしたら大変。列を乱みだす上に衝突しょうとつなどの危険きけんがあります。まさに命がけで、必死に後ろについてきました。

編隊飛行へんたいの帰りには、もうひとつの訓練が待っています。

飛行場の上空およそ千五百メートルになったとき、一列になり、飛行場のはしに置いてある、実物の大きさのB 29アメリカ爆撃機ばくげきの模型もけいめがけて突入とつにゅうの訓練をすめるのです。

下では指揮官しきかんが見ていて、あとで高度や角度など、それぞれに注意されました。

空中戦のために作られた「零戦ぜろせん」の場合などは、スピードが上がる、空中で機体

がバラバラになるおそれがあります。

そのためエンジンをかけんして、スピードをおさえなくてはならず、エンジンをしほれば、エンジンが止まってしまいかもしれない危険な作業なのです。

しかし、特別攻撃隊にとっては、それが「最後の仕事」。敵に体あたりするまでは、絶対に失敗するわけにはいきません。

隊員たちは、気持ちを引きしめ、訓練を重ねていきました。

東京大空襲の前後

訓練をするとき以外の生活は、かなり自由でした。

すぐにも戦闘態勢にかかれるように「外出禁止」になっていましたが、毎日の規則は、大目に見てもらえるようでした。

あるとき、八人の隊長の考えで、飛行機を操縦するとき首に巻くマフラーの色

※零戦……零式艦上戦闘機の通称。旧日本軍の主力戦闘機

を、各隊ごとに区別しようということになりました。

さっそく落下傘を作るときの柔らかい絹の布を用意し、各隊の色は抽選で決めて染め上げました。なかなかの出来ばえです。

二十歳を過ぎたばかりで、しかも死ぬことを覚悟した若者たちが、それぞれの色のマフラーを首に巻いて、照れたり冷やかし合ったり。酒を飲んで、さわいだりもしました。

緊張の毎日の中で、ひとときの楽しみでした。

つぎの朝、そのマフラーを巻いて一番に飛行作業に出た隊員が、急いでもどつてきました。

「そんなはでなカラーマフラーをするとは、何ごとだ。すぐさま捨てろ」と、上官にいわれたとか。

命令とはいえ、捨てられるものではありません。みんなは、マフラーを自分の持ち物を入れる箱の奥深くに、そつとしまいこみました。

そのことがあつてから、みんなの心は、さらにひとつになつたように思います。「面会」は、平日でも、飛行作業にさしつかえなければ許可きよかされます。

隊員のそれぞれに、大学時代の同級生、母親に連れられたむすめさん、知り合いのむすめさんなど、いろいろな女性じよせいが面会にやってきました。

そんな中で、二人の隊員から、

「結婚けっこん式しきをあげたいので、手続きをたのみます」

と、いわれ、

「われらの任務にんむが、どんなものか考えれば、あとでこまることにならないか」

と、わたしわたしがきくと、

「相手あいてときちんと話し合つて決めたこと。指導官しどうかんの了解りようかいをいただいてほしい」

と、きつぱりきつぱりといひます。

間まもなく許可きよかがおりて、二人は周りの者に冷やかされながら、結婚けっこん式しきのために東とう京きやうへ。

とうきょう
東京出身の隊員たちも、数人
がいはくきよか
が外泊許可をもらい、とうきょう
東京へ向
かいました。

そして、昭和二十年三月十日。

とうきょう
東京は、アメリカ軍のB29爆撃
機きによる大空襲だいくうしゅうを受けたのです。
わが筑波航空隊つくばでも、すぐに命
令が出ました。

「むかえ撃つ準備じゆんびをして、待て」
戦闘機せんとうきの「紫電改むしでんかい」や「零戦ゼロせん」
などがあわただしく引きだされ、
搭乗員とうじょういんは、みな指揮所しきじよに集合。

整備員は、いつでも機体が飛び立てるように準備。エンジンは、まわっています。

しかし、出撃命令が出ないまま、朝をむかえました。

東京に行った隊員たちは、朝帰ってくる予定でしたが、昼ごろになって到着。

「東京は、まだ燃えている。交通、通信、電気などみんな止まっている。被害は想像できないほどだ」とのこと。

結婚のために東京へ行っていた二人も、ようやく夜おそくつかれ切って帰ってきました。

家も家具も全部焼けてしまい、結婚式どころではなかったそうです。

自宅の庭の防空壕で夜を過ごし、やっとのおもいで帰ってきました。

みんなで無事を喜び合ったのもつかの間、翌日からげしい訓練が始まりました。

※紫電改……旧日本軍の迎撃用戦闘機、紫電の改良機

※防空壕……空襲のときに避難するため、あらかじめ地中につくった穴

ある別れ

東京大空襲のあと、わたしは第十二筑波隊の隊長に決定。隊員たちは、「死ぬときは、いっしょだ」とちかい合いました。

四月に入ると、特にアメリカ軍の沖繩への攻撃が激しくなり、筑波からも、第一から第九隊までが、戦闘機で中継基地の宮崎県富高みやざきけん⑤とみたかに向かつて飛んでいきました。その直前に、ある出来事がありました。

一人の隊員のところに、父親が、およめさんになる女性を連れて面会にやってきました。ぐうぜんにも、ちようど出発の前日のことです。

どうしたものか……。いくら考えても出発の日を変えることなどできません。事情を知った指揮官が特別に許可を出し、その夜は、父と息子、その婚約者がいっしょに近くの旅館に泊まって、夜おそくまで別れをおしんだそうです。

つぎの朝、戦闘機に乗りこんだかれの操縦席のそばには、婚約者から「わたし

のかわりだと思ってく下さい」と贈られた人形がかざられていました。

そして、かれは父と婚約者に最後の別れを告げると、静かにうなずき、仲間と編隊を組んで、宮崎の中継基地をめざして飛びたっていきました。

いつまでも空を見上げて立ちつくす婚約者と、落ち着いた態度でまわりの人々にあいさつをする父親。

それぞれに別れの悲しい気持ちを必死におさえている様子がわたしたちにもわかり、声をかけることさえできませんでした。

そして、四月六日。かれは、そばに人形を乗せたまま、沖繩に向けて出撃。二度と帰らぬ人となったのです。

こうして、次々に戦友たちが特別攻撃隊員として出撃し、戦死していきました。残ったわたしたちにも、いつ出撃命令がおりるかわかりません。

しかし、だんだんと燃料不足になり、飛行訓練の時間も制限されるようになりました。

燃料も、ガソリンにアルコールを混ぜて使うので、エンジン部品のよれもひどく、乗る者も整備する者も、大変な苦勞です。

これから、日本はどうなっていくのだろう。みんなが、そう思い始めていました。

基地へ

四月二十六日。いよいよわたしたちの隊も、宮崎県の富高基地に移ることになりました。

しかし、戦闘機が間に合わず、二機の輸送機で行くことに。

「この輸送機は、戦闘能力はなく、スピードもおそい。敵機におそわれると、どうにもならないから、みなさんも、十分に見はりの協力を」と機長から、いわれています。

これから戦場に出ていくのです。ゆだんはできません。

筑波山をあとにすると、東京の上空へ。一面の焼け野原。これが東京だろうか

……。そして箱根、静岡、奈良、やがて同じく大空襲を受けた大阪の上空を過ぎ
て、瀬戸内海から宮崎へと飛んでいきます。

天気は晴れ。視界もよし。わたしたちは、しっかりとあたりを配っていました。

幸いなことに敵機にはあわず、無事に基地に着いた時には、ほんとうにほっとしました。

その上、零戦で飛び立ったはずの仲間の何人かが出むかえてくれたのです。ここへ来てから新しく編成しなおしたため、後まわしになって、残っているとのこと。

わたしたちは、かたをだき合って、「また会えてよかった」と心から喜び合いました。

基地でわたしたちが住むところは、防空壕の中。とても広くて、集会所もあり、きちんと整備されています。

わたしたちは、身の回りの物を中に運んでから外に出て並び、基地副長のガンさ

んこと岩城いわき中佐ちゆうさに無事着いたことを報告ほうこくしました。

この富高基地とみたかきちには「神雷部隊じんらいぶたい」とよばれる人たちがいました。その勇敢ゆうかんさは、

「これぞ特攻とっこうの集団しゅうだん」と日本国じゆうくに知れわたっており、わたしたちもがんばら

ねばなりません。

敵機てつきは、ときどき、太平洋上にいるアメリカ航空母艦こうくうぼかんから飛んできて、襲撃しゅうげきし

てきます。

初めて見るロケット弾だん。攻撃こうげきされるところや、その威力いりよくを見てみたいと、みんな

は防空壕ぼうくうごうの入り口まで、どつとおし寄せよしました。

そのとき、副長のガンさんが中から走りでてきました。

「そこよりも前に出てくるやつは、おれが相手だ。ロケット弾だんは防空壕ぼうくうごうの中にも入
ってくるぞ。みんな引つこめ。あぶない！ 早くしろ」

※中佐……兵隊の階級かいかいの一つ

※特攻……特別攻撃隊とくべつこうげきたいの略

※航空母艦……多くの飛行機を乗せていて、そこから離発着りはつちやくさせることができる軍艦

敵機が襲撃している最中なのに、自分の危険もものともせず手に機関銃を持ち、外に背を向けてどなります。

わたしたちは、はっとしてわれに返り、あわてて奥の方にもどりました。こんなすごい人は、今まで見たこともありません。うわさどおりの荒武者でした。それ以来、わたしは、ガンさんのことを尊敬するようになったのです。

家族の思い

基地に移ったとはいえ、飛行機の割り当ては、なかなか決まりません。

訓練ができないと運動不足になるので、わたしたちは、野球やバレーをしたり、基地の中の川で魚つきりをして、いつ来るかわからない出撃命令を待っていました。こんなことは、はじめてです。

五月のある日。わたしは、当直の将校によばれました。

「加美山少尉、大変な任務だが、応接室に、町田少尉の母親と妹さんが来ておら

れる。会ってあげてくれ」

わたしは、息をのみました。町田少尉は、すでに特攻隊員として、沖繩に出撃。戦死していたのです。何と伝えれば、よいのでしょうか。

二十一歳のわたしには、無理な任務です。胸が痛くなりましたが、命令なら仕方ありません。うす暗い廊下を歩き、応接室のドアをノックしました。

「兄は、まだですか」

二十歳ぐらいの妹さんが声をかけてきて、五十歳ぐらいのお母さんと、ドアの方をじっと見つめています。

テーブルの上には、当直将校の心づくしのミカンのかんづめとジュースがおいでありましたが、食べた様子もありません。

「いつになったら……、どこに行ったら会えるのですか」

※将校……軍隊で戦開の指揮をする人

※少尉……兵隊の階級の一つ

※当直……当番で泊まること

わたしが「町田少尉は、もう出撃されました」といっても、理解できない様子でした。

しかし、どうしても伝えなくてはと、わたしは、声をふりしぼっていいました。

「町田少尉は、沖縄で、敵艦に体あたりをして、特攻をかけられました」

ようやくわかったのか、妹さんは声をしのんで泣かれ、お母さんは天井を見上げて、しばらくくちびるをかんでいました。やがて、

「わかりました。戦死したということですね」

しっかりとした声でいって、わたしの方をふり向かれました。

わたしはうなずいて、筑波航空隊でいっしょだった町田少尉の思い出を話しましたが、お母さんの耳には、何も聞こえていないようでした。

その晩は、地元の旅館にとまって、翌朝の列車で帰っていただくようにと、宿と列車の切符の手配をすませ、わたしが暗い夜道を宿まで送りました。

何ともいえない気持ちでした。もう二度と、こんな役目はしたくありません。

ところが、隊に帰ると、

「林少尉にも、ご両親が面会に来ておられるので、すぐにお会いしてくれ」

とのこと。仕方なく、また応接室おうせつしつに行くと、こしが少しまがりかけたようなご両親が待つておられました。

今度こそ、ちゃんといおうと思ひました。

「林少尉は、もうここにはいません。沖繩攻撃の特攻おきなわこうげき とっこうに出たようですが、はつきりしたことは、わかりません」

二人は顔を見合わせ、声も出さずになみだぐんでおられました。

わたしはまた宿までお連れし、ふすま一つへだてた、となりどうしの部屋に、町まち田さんと林さんの家族が泊とまられることになりました。

隊にもどり、ようやく防空壕ぼうくうこうに入つてほつとしていると、八時ごろ、

「林少尉は、まだ鹿児島かごしまの鹿屋基地かのやきちに残っている」

という情報じょうほうが飛びこんできました。

こんなにうれしいことは、すぐにご両親に知らせてあげたいと、わたしは自転車で、まっ暗な道を飛ばしました。

となりの部屋の町田さん母子のことを思うと、気が重くなります。しかし、これも現実なのです。わたしは、宿の階段をかけ上がりました。

林さん夫婦は、夕食も食べずに、テーブルの両側に二人向かいあって、ポツネンと座っていました。

「林さん！ 息子さんは、まだ元気でおられますよ」

声をかけると、ご両親は、ぱつと顔をかがやかせていわれました。

「会えるのですか！」

そのとき、となりの部屋から声がかかり、町田さん母子が入ってきました。

「あまりにも不公平じゃありませんか」

妹さんはそうさげんで、お母さんにだきつきました。

お母さんは、またしつかりとした態度で、

「林さん、よかったですね。ぜひとも息子さんに会いに行かれるべきです」

とすすめました。心の中は、どんなにか悲しかったことでしょう。

わたしは、隊にもどつてもねむることができず、翌朝早く気になって宿に行つてみました。

町田さんは福岡に帰られ、林さんも鹿児島鹿屋基地に向けて、もう出発されたあとでした。

林さんご夫妻は、宿の人が心をこめてつくつてくれたおにぎりを持ち、

「たとえ自分たちが空襲にあおうと、絶対に息子に会ってきます」
といわれたそうです。

わたしは、ずっと父母に手紙を書いていませんでした。わたしが出撃すると知らせれば、遠い岩手から父母は、かならず面会に来てくれるでしょう。しかし、道中の混雑する列車や空襲の危険、会ったあとの別れのつらさなど考えると、どうしても来てもらいたくなくなつたのです。

しかし、この二つの家族の深い愛、親が子を思う気持ちにふれて、わたしは、父母のことを思わずにはいられませんでした。便りもしないわたしのことを、父も母もどんなに心配していることが。

わたしは、どうしたらいいのでしょうか。

五月十七日。ガンさんから呼び出しがありました。

「明日の朝、鹿屋基地かのやきちに移動して命令に従うように。隊の編成へんせいは四機。しっかりやってくれ」

「来るべきときが、ついに来た」と頭の中はまっ白になり、少し足がふるえました。わたしは防空壕ぼうくうごうにもどり、身の回りの物や、数枚すうまいの写真、日記のようなもの、そして最後のお別れにと心をこめて書いた手紙を、故郷こきやうの父母に送ってもらうようにたのみました。

今から手紙を出しても、面会には間に合わないのはわかっています。

お父さん、お母さん、いつまでもお元気で……。

わたしは心の中で呼びかけました。

あとは、特別攻撃隊こうげきたいの一員として、出撃命令しゅつげきを待つばかりです。

(原作 加美山 茂「私だけの人生 特別攻撃隊こうげきたいの訓練 出撃命令しゅつげきを待つ」)